

## 「インセプション」

★★★

2010（平成22）年7月19日鑑

賞<梅田ピカデリー>

監督・製作・脚本：クリストファー・ノーラン

コブ（抜き取り屋）／レオナルド・ディカプリオ

サイトー（観光客）／渡辺謙

アーサー（ポイントマン）／ジョゼフ・ゴードン＝レヴィット

モル（コブの妻）／マリオン・コティヤール

アリアドネ（設計士）／エレン・ペイジ

イームス（偽造師）／トム・ハーディー

ユスフ（調合師）／ディリーブ・ラオ

ロバート・フィッシャー／キリアン・マーフィー

ブラウニング／トム・ベレンジャー

モーリス・フィッシャー／ピート・ポスルスウェイト

マイルズ／マイケル・ケイン

ナッシュ／ルーカス・ハース

2010年・アメリカ映画・148分

配給／ワーナー・ブラザーズ映画

### <こりゃあまりにも難解！私には理解不可能？>

予告編を観た時から、本作は「いかにも難解！」というイメージだった。クリストファー・ノーラン監督が長年温めていた構想を実現した本作のテーマは、他人の夢の中に侵入してアイデアを盗むこと。パンフレットによれば、「エクストラクション」とは「人が最も無防備な状態となる夢を見ている間に、その潜在意識に入り込みアイデアを抜き取ること」で、「インセプション」とは、その逆の「ターゲットの意識下にアイデアを植えつける行為」らしい。

本作は島に流れ着いた「抜き取り屋」のコブ（レオナルド・ディカプリオ）が、観光客のサイトー（渡辺謙）と対面するシーンから始まるが、その直後に展開される抗争劇からして難しい。「夢の世界では現実の世界より時間の進み方が速い」らしい。また「夢の共有」とは、「夢の世界を構築し、その中へターゲットを連れ込むこと」、したがって「夢の世界にいる者は、そこが現実であると認識する」らしい。冒頭からそんなややこしいセリフが続き、建物が崩れ、銃が乱射されるが、これではよほどその方面の予習をしておかなければ理解不可能？

コブが設計士のアリアドネ（エレン・ペイジ）、ポイントマンのアーサー（ジョゼフ・ゴードン＝レヴィット）、偽造師のイームス（トム・ハーディー）、調合師のユスフ（ディリーブ・ラオ）らと組んで行うインセプションとは？サイトーがコブらにインセプションを依頼するのは、ライバル企業のフィッシャー社をつぶすためだが、そこでコブが立てた作戦とは？

こりゃ好きな人にはたまらないかもしれないが、還暦を迎えた私には難解で、とても理解不可能？

### <『マトリックス』と同じ違和感が？>

本作は『ダークナイト』（08年）ほどの製作予算ではないらしいが、それでもあれだけ建物や車を壊したり、銃を乱射すればカネはかかるはず。

コブが立てた作戦は、三層の夢の世界を構築。つまり、現実の世界から遊離した夢の世界の第1階層はロサンゼルスで、第2階層はホテルで、第3階層は雪山にある病院で展開され、そのそれぞれが密接に絡まっているらしいが、残念ながら私にはサッパリ……。『マトリックス』（99年）では拳銃の弾をよけるキアヌ・リーブスの姿にビックリし、違和感を感じたが、本作では縦と横がひっくり返った世界や、ホテルの中で展開される無重力の世界などに違和感がいっぱい。撮影技術が進歩するのはいいが、あえてこんなワケのわからない世界をスクリーン上に映し出す意味は、一体どこに？

### <あの小道具の意味は？あの美女の意味は？>

本作ではコブが持つ小さなコマが小道具として大きな意味を持っている。これは現実の世界と夢の世界を行き来するコブにとって必要不可欠な小道具だが、それはなぜ？それは、コブにスカウトされてはじめてコブたちのグループに加入した優秀な女子学生アリアドネの質問を聞いていると、何となくわかったような気になってくるが……。

他方、本作を単なるアイデアものではなく人間ドラマにしているのは、コブが2人の子供たちに会いたいと願う気持ちをベースにしていることと、元々優秀な設計士だったコブの死亡した美しい妻・モル（マリオン・コティヤール）の登場。『エディット・ピアフ／愛の讃歌』（07年）での熱演が記憶に新しいフランス生まれのマリオン・コティヤールが、『パブリック・エネミーズ』（09年）に続いて、出番は少ないながらも美しいドレス姿で再三登場する。さて、こんな美女登場の意味は？

### <このスピードにはとても、とても……>

最近のハリウッド大作のアクションは、『007／慰めの報酬』（08年）をはじめとしてスピードが速すぎてとてもついていけないものが多い。本作もそれは同じ。コブが全力疾走で逃げ回るシーンも、どこをどのように走っているのかサッパリわからないから、そんな状況下でなぜ偶然サイトーの車に引き込まれて助けてもらえるのかが不思議。また、ハリウッド映画にはカーアクションが不可欠だから、本作でもそれが華々しく展開されるが、そもそもユスフ運転の車がどの道をどのように走っているのか、どこで180度転回したのか、そんな経路がサッパリわからないから、スクリーン上のスピード感にもかかわらず、私にはイマイチ迫力が感じられない。そこらあたり、もう少し何とかならないものだろうか？

そのうえ、本作は前述のとおり、夢の世界がロサンゼルス、ホテル、雪山にある病院の3つの階層に分かれているから、スクリーン上ではその3つの階層でのアクションが次々と展開されていく。しかし、その意味がイマイチ不明だから、それについていくのはしんどい。このスピードにはとても、とても……。

### <どちらが現実？どちらが夢？>

織田信長が愛したのが『敦盛』。そのセリフは「人間五十年 下天の内をくらぶれば 夢幻のごとくなり」。つまり、この世でいくら権勢を誇っても、それは夢幻のようなものだということ。他方、豊臣秀吉の辞世の句も「露と落ち 露と消えにし 我が身かな 浪速のことは 夢のまた夢」だから、同じようなもの？

これは織田信長や豊臣秀吉の実感だろうが、本作はクリストファー・ノーラン監督があえて夢の世界にテーマをあてて、ややこしい構想を映像化したもの。したがって、どこが現実で、どこが夢かははっきりしているはず。そう思っていたが、さて本作の結末は？

結末において、コブはやっと念願の2人の子供と会うことができ、2人を腕の中に抱きしめるのだが、一方机の上で回っているのはあの小さいコマ。コマは永久に回り続けるはずはなく、一定の時間回転するとストップするのはやむをえない。そして、そのストップとともにスクリーンは真っ暗になり映画は終わるが、さてコブが2人の子供を抱きしめているのは現実の世界、それとも夢の世界？さあ、そこらあたりを映画鑑賞後じっくりと……。

2010（平成22）年7月20日記